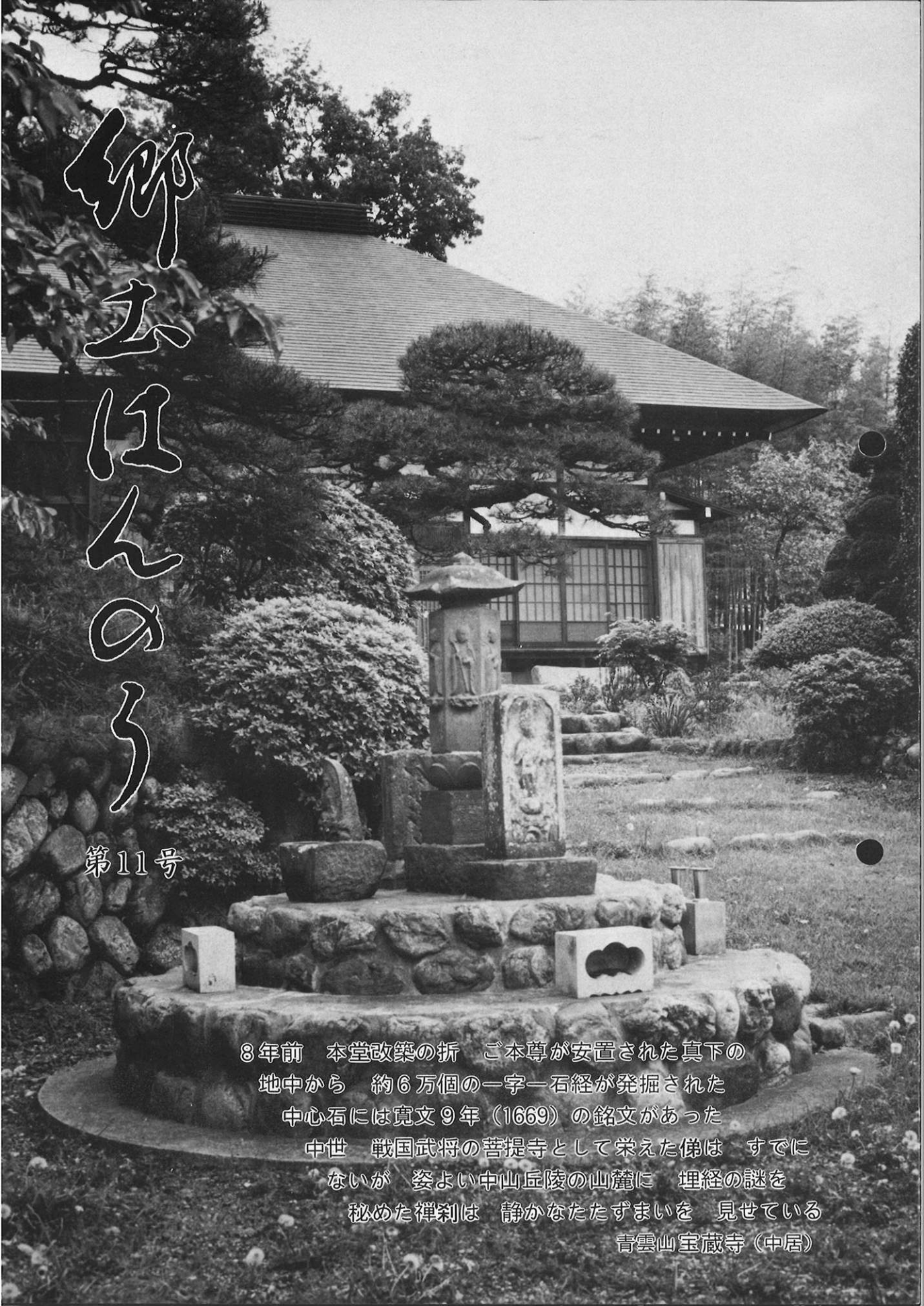
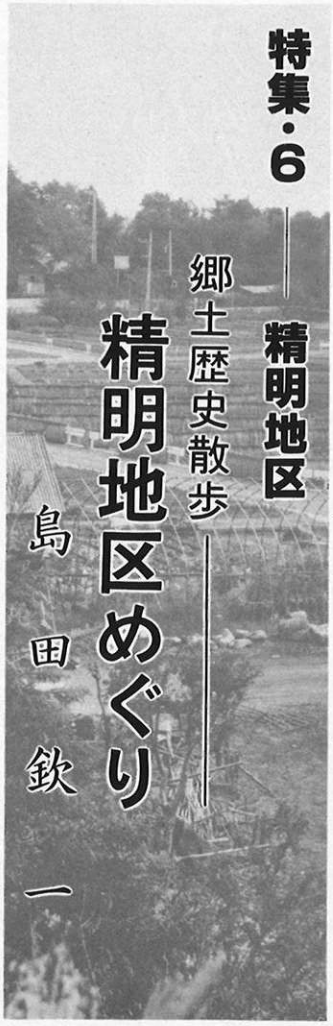


仰土けんのう

第11号

8年前　本堂改築の折　ご本尊が安置された真下の
地中から　約6万個の一字一石経が発掘された
中心石には寛文9年（1669）の銘文があった
中世　戦国武将の菩提寺として栄えた俤は　すでに
ないが　姿よい中山丘陵の山麓に　埋経の謎を
秘めた禅刹は　静かなたたずまいを　見せている
青雲山宝蔵寺（中居）



特集・6 ――精明地区郷土歴史散歩――

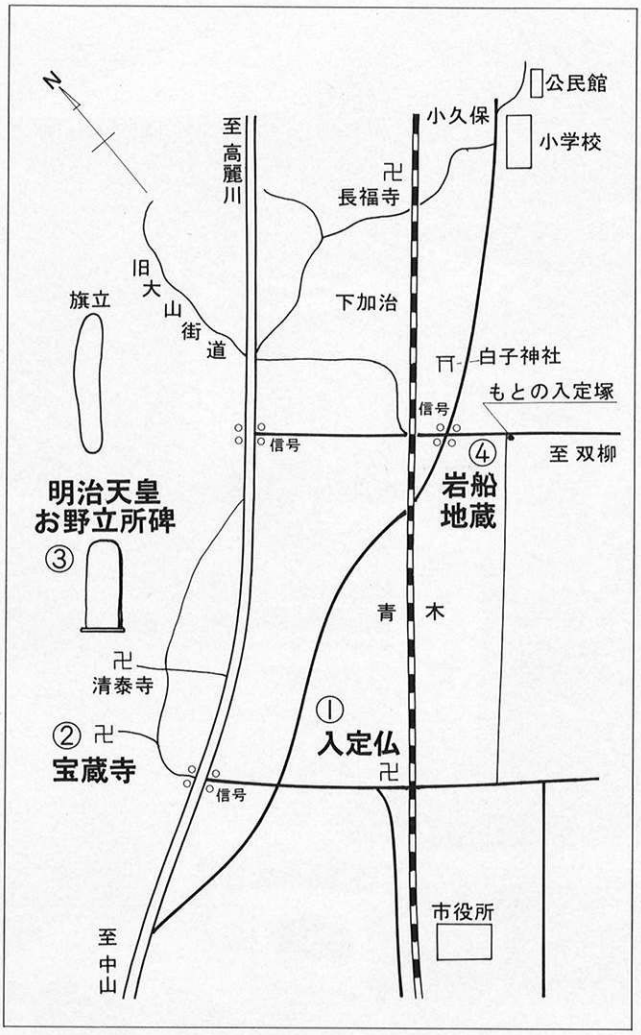
精明地区めぐり

島田欽一

秋もたけなわの十月十四日。精明地区の郷土史散歩とて、集まった人たち二十数人。私がその道案内の役を仰せつかった。本来ならばガイドというべきであろうが、そうなると道案内の外に、それ相応の説明もしなければならない。しかし、こと郷土史に関する限り、あまりにも謎の部分が多く、確信をもってことに当たるなどということは、到底できることではない。そこで案内にとどめてもらった。

もともと、歴史は後世に於いてつくられる、といわれているように、古代のことについては、その出土遺物からの推測であり、中世から近世にかけても、残されている記録は極めて一方的であったり、後世の付会がまかり通っていたりするために、もろもろの学説が生まれ、時として歴史の書き直しを迫られることもある。それが一地方のことともなるとなおさらで、遺物を確定できる記録は極めて乏しいのが実情であり、郷土史探究者の泣きどころとなっていることは、ご存じの通りである。

さて、ここに改めて補足を加えたりしながら、次の要図によって、その日の行程をたどっていくことにする。いわゆる紙上案内である。途次、いくつもの「わからない…」部分につきあたると思うが、その点を深く心にとどめて置いてもらいたいものである。



① 入定仏

市役所の庭から出かけて、市営住宅の西側を北上すると、中居前の台上である。間もなく八高線の踏切りにかかる。渡ってすぐ右手の三体の石仏が入定仏である。写真の中央のそれは、弘法大師の座像であって、大師も入定を遂げていることから、ここでも入定塚の上に建立したものであろう。

この入定仏は、元来ここにあったものではなく、青木も田圃の南、通称前青木と呼ばれている集落の東端の、大山街道からの入り口にあったものである。

昭和四十二年、そこの道路拡幅の工事が行なわれていた。塚を切り崩していくと、突然、空洞が現れ、人骨があったという、そこでただちに供養の上、現在の場所に移したものである。

ここの入定の主は果たして誰なのか、碑文から推して六部某と思われるが、そうだとすれば、右手の碑の「□道」か、ということにもなる。しかし、いずれにしても、伝説めいた入定話は真実のことだったのである。

② 宝蔵寺

ここでは、文化財保護審議委員の森源蔵さんが、あらかじめ寺の扉を開いて待っていてくれた。

はじめて目にする大石重仲の位牌。そして開山年代論争から青木、柳戸らの一族の檀家脱退事件。守田氏との関係。大石重仲の位牌がなぜここにあるのかなど、それからそれへと興味は尽きない。ここからはまた、昭和五十八年に本堂改築の際、一字一石埋経が見つかって話題を呼んだことがある。

いずれにしても、ここの寺と大石氏とのかかわりなどについては、史家のいずれもが「と思われる」にとどめている。今後の研究にまたねばならないことが多々あるようである。

③ 明治天皇お野立所の碑

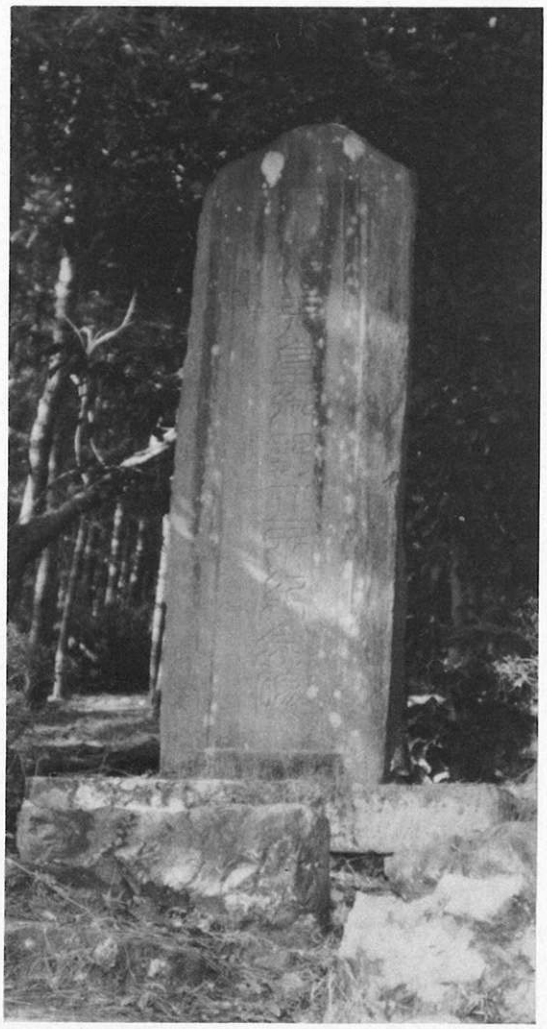
明治十六年四月、近衛諸隊の演習が飯能で行なわれた。そして、演習統監の場所として、愛宕山（天覧山）と中居の吾妻台に明治天皇がお立ちになられたという。記録によれば、それは四月十八日とある。

この記念碑「明治天皇御野立所記念碑」とあって「陸軍大将鮫島重雄書」だけで、どこにも建立者の名もなければ、その年月もない。まことに不親切な碑である。

ところが、黒井石龍編の『精明郷土史』を見ると大正元年とある。さらにその時の記念写真も見つかり、大正天皇の代に、はじめての大演習が本県で行なわれたその直前に建てられたものであることも判明した。写真には、時の村長西村庄兵衛、大沢菊三郎校長をはじめ、当時の村の名士の顔が並んでいる。

明治十六年といえば、西南戦争の後、とかく世情不安定の時である。そこで皇室の勢威を知らしむるため、軍の演習を各地で頻繁に行ったという。いまのことばで言えば、さしずめ明治政府のデモンストレーションということであろうか。

お野立所の碑は、当日雨上がりの山道では、足下が危いということで割愛。清泰寺は法上遷化の直後でもあって黙禱をささげて通過。永禄六年、北條氏康が松山城を攻めるとき、ここに大軍あり、として旗を立てたという中居裏の山を指呼しながら、旧大山街道を横切る。そして小久保の長福寺前へ出る。八高線の乗客の目を楽しませてくれる枝垂れ桜の古木を見て、寺の裏山の小久保の村のはじめの人たちが住んでいたという、いまに残る謎の屋敷跡。とても短時間では見つくせるものではない。



④ 岩船地蔵尊

小久保へ行き着いたところで公民館で昼食、勉強会。帰りがけに下加治の信号のところの岩船地蔵尊を見て予定の行程はおしまいである。

ここは旧大山街道沿いにあたり、いまはないが、加治の七本榎の一本も記憶に残っているところ。岩船地蔵といえば、日本の三大地蔵といわれる栃木県は岩舟町の高勝寺との因縁であることは明らかである。私の知る限りでは、吾野から毛呂山町へ抜ける山中に三体、狭山市に二体あるという。それが北向き地蔵と呼ばれていることは、本尊の方へ向かってということで、それなりに故あってのことだという。

いずれにしても、この辺まで岩船地蔵尊の信仰圏が及んでいたという証で興味あることである。

法螺洞

井上峰次

飯能の中山から宮沢湖へ向かう県道を、山手に入ったところに建つ清泰寺は、小堂ながら周辺の静穏なたたずまいに溶けこんだように、古朴で、地味で、しかも、どっしりと腰を据えている。

精明の歴史散歩には、欠くことのできない清泰寺なのに、折あしく先住のご不幸の直後だったため、私達は門前でかいま見るだけで過ぎ去った。しかし、日を経るにつれ、心残りがつのるのをおさえ難く五月初め、桑山・内野・井上は同寺を訪れ、本堂とご本尊を拝し、撮影を許された。

飯能市史資料編Ⅴの「清泰寺」と、黒井石龍著『精明村史稿』によれば、本堂は明治六年に高麗山聖天院の経蔵を移築したと、棟札に記されているという。

――現ご住職からもそのように承った――経蔵だったとのことだが、方三間、棟頂の露盤に宝珠をおく方形造りで、四囲に縁を巡らす構成は、中世の阿弥陀堂様式を踏襲している。小さい偉丈夫な江戸建築で、軒反りのゆるやかな曲線は安定し、二重極と太めの円柱は堅牢でゆるぎない。

飯能に現存する屈指の建造物と言えそうなこの本堂は、当地方の近世建築を知る上で是非解明したい。その手懸りを求めて、私は日高町史編さん室を訪ねた。聖天院文書目録を見せていただいたが、該当する記載はなく、日高町史――文化財編――にも触れてなかった。ただ聖天院の境内の詳細図には、堂宇跡と思える礎石が記されていた。聖天院文書は厖大なものとか、その中には清泰寺の関係も相当数あるようなので、あるいは、経堂について書かれている文書もあるかもしれない。一切今後の解明に俟ちたい。

風土記稿巻之百八十四、新堀村聖天院の条には「釋迦堂、佛經を蔵して置くゆへ、經堂とも唱ふ」とある。今の清泰寺本堂を指しているかどうか不明だが、棟札には「享保年中高麗山……中略……一切經爲安置一宇建立……後略……」と記されているという。これからも、本堂が聖天院の経堂（蔵）であったことは、ほぼ確かであろう。

本堂には、阿弥陀如来坐像が須弥壇上の厨子内に安置されている。像高五二・四センチメートル、上品下生の印を結び、台座上に右足前に結跏趺坐する通例のスタイル。細部の計測・調査は、昭和五十三～五年に行なっているため今回は行なわなかったが、藤原末から鎌倉にかけての様式をもつ、整ったお像で保存状態も極めて良い。飯能でも貴重なお像であることから、市の指定文化財になっている。なお細部については、「飯能の仏像Ⅱ」を参照されたい。

清泰寺の本堂が聖天院から移築されたことは前書の通りだが、本堂の阿弥陀像も、堂と共に移されたのでは？　と仮想してみた。と言うのは、日高町史に聖天院阿弥陀堂の阿弥陀像が、県博の林先生の刻明な解説付きで載せてあったから。この阿弥陀像は、清泰寺像より藤原調が濃く、固さもなく、みずみずしさが感じられるが、造像の基本は両像とも同じ様式に拠っている。即ち系譜の同じ仏師の手になると想像できる。また、両寺は古くから本末関係にあるのだから、本寺で造像し、末寺に移すのは自然であると想定した。

だが、清泰寺像は風土記稿に「本尊阿彌陀木の坐像にて、長一尺六寸、運慶の作と云、」と記されている。一尺六寸は四八・五センチメートル、かって計測した五二・四センチメートルとそれ程の差がない。当然現存する清泰寺像を書いたのに相違なかろう。とすると阿弥陀像は清泰寺にあって、安政三年（一八五六）に堂宇が焼けた時も、無事守られていたと推測できる。

それにしてもこのお像は、本堂にしっくりと合い、まるで異和感がない。

清泰寺の本堂については、精明村史稿に書かれている外は何も明らかでない。建築の手法構造を精査し、由来を調べる必要があると思う。そして、阿弥陀像と共に、保存について可能な手段を講ずべきと思う。

郷土史研の歴史散歩は、これまでごく軽い見学の会だった。事後の検討なども生にえのまま終わっていた。でももう、そろそろ疑問や、批判が出て、問題提起があって良い頃であろう。だから歴史散歩の事後談の意味で、率直な感想を述べてみた。

清泰寺の本堂正面には「法螺洞」と書かれた扁額が掲げてある。法螺貝は修験の法具で山伏が吹き鳴らしたというが、その音が遠くまで聞こえるのを、仏の説法が普く及ぶのに喩えたものなのか。いづれお堂を調べさせていただくのと平行して、ぜひ法螺洞の意味もうかがってみたい。

精明見て歩き

浅見恭二

平成二年十月十四日、島田欽一さん、吉田靖さんの案内で、精明地区歴史散歩が行なわれた。

前日まで降っていた雨もやみ、秋晴れの散歩日和です。市役所玄関前を出発。飯能第一中学校の前の道を北へ行く。東西に通っている道がある。江戸へ行く道だ。西へ行くと中山方面。東へ行くと笹井の観音堂の方へ行く。そのずっと先が江戸だ。（村ノ北寄ニ川越及ヒ江戸ヘノ行路一條アリ路幅七尺許。『新編武蔵風土記稿』青木村より）

中居の八高線、大和田踏切際に石仏が三体ある。ここで石仏と入定塚の説明を聞く。（六十六部が生きたまま地中の穴の中に座し読経しつつ死んでいった塚）

さらに北へ行く。県道飯能寄居線を越え、宝蔵寺に着く。壇徒総代の森源蔵さんから寺の歴史・仏像・資料等について説明を聞いた。本堂の横の墓地の中に高さ約二メートルぐらいの立派な板碑がある。年号を見ると文永四年（西暦一二六七年）鎌倉時代のものである。

宝蔵寺をあとにして第二天覧山（明治十六年陸軍大演習のさい、明治天皇がこの山にお立ちになった）を遠くに眺め、清泰寺前を通り大山街道へ出る。

ここで旗立松の説明を聞く。（村ノ北宮澤村界ノ山ニアリ永禄年中北條氏康松山城ヲ攻ル時此所ニ出張シテ旗ヲ立シ舊跡ナリ故ニ松ヲ栽テ標セシナルヘシ松ノ圍五六尺許ナリ、『新編武蔵風土記稿』中居村より）

これより長福寺の庭さきを通り南に向う。しだれ桜の木がある。春になり花が咲いた時はきれいだろうと想像する。

小久保の林の中の墓地内にある、福沢諭吉の九男・己六が建立した養母の墓の説明を聞き、田んぼ道を歩く。稲刈り・はざかけ・脱穀、昔の農村風景が見られた。

十二時ごろ精明公民館に着き昼食をとった。

休憩後勉強会があり、島田さんから、双柳近辺に今も面影を残す大山街道について、また、江戸末期からの大山信仰の実体と、神奈川県大山に向かっての信仰道コース・足で歩いた調査結果などを解説してもらう。

その後、精明公民館を出発。白子神社前を通り岩船地蔵に着く。この地蔵様は北向地蔵といい、栃木県の岩舟町の方向に向いて立っているとのこと。

このあと大山街道を南へ行く。道路拡張で石仏、塚もなくなった入定塚跡の前を通り、双柳の稲荷神社に着く。境内には石灯籠や庚申塔などあり、町なかでよく見かけるお稲荷さまと違って立派な社である。

隣が秀常寺だ。門前に弘法大師腰掛け子授け石があり、子どもがほしい女性が腰掛ければ、子どもが授るという霊験あらたな石だそうだ。

墓地内を見まわすと、立派な墓石が続々と並んでいる。また縁者がいなくなり整理された墓石もあり、無情を感じた。

秀常寺をあとにして市役所玄関前に着く。これで今日一日の日程も無事おわり解散した。

偲ぶ喜び

――比企地方めぐりにて――

藤村美代

郷土史研の比企歴史散歩に参加させて頂きました。このような有意義な例会を企画して下さいましたことを感謝致しております。

戦前戦後と、他のことを考える暇もなく夢中で過ごして来て、今やっと平穏な日々が送れるようになった私には、静かで真面目な人々と共に、昔を偲ぶことの出来た喜びは大発見でした。

このように身近に歴史があったのです。

特に印象に残った場所は、萩日吉神社。うっ蒼たる杉の巨木、苔むした石の階段。ここで流鏑馬の神事が木曽義仲の霊を慰さめるために行なわれ、現在も続いているとのこと。しばらく頭の中に、昔の武士の姿が時代劇のように浮かびました。

慈光寺迄の山腹の板碑も立派なものでした。慈光寺の方丈様もウィットに富んだお人柄で、楽しくお話を伺うことが出来ました。宝物殿も立派なもので、見学の機会に恵まれたことを有難く思いました。

静かな山奥の霊山院は八百年も昔からの由緒ある禅寺とのこと。信心深い往時の人々のことを感慨深く思い浮かべました。

菅谷館跡についても歴史資料館で興味深く説明を聞くことが出来て、畠山重忠等、五十年も昔、歴史の時間に耳にしたことのある昔の人々の名前が沢山出て、今さらのように日本の歴史を勉強しなくてはと、忘れていた楽しみを思い出させてもらいました。

これからも埼玉を知り愛して行くためにも、郷土史研に入会したことをうれしく思っております。

ずいひつ ある覚書から

吉田 茂

幕末の頃、医者をしていたという隣家の文書中に、嘉永六年（一八五三年）の薬礼金受納覚書と表書きした一冊がある。

その年の正月から始まって全部で八十六件、末尾が正月十七日とあるから年を越していると思えるが、ほぼ一年間の記録と見てよいだろう。当時の薬礼がどのように支払れたかわからないが、意外に少ない感じである。

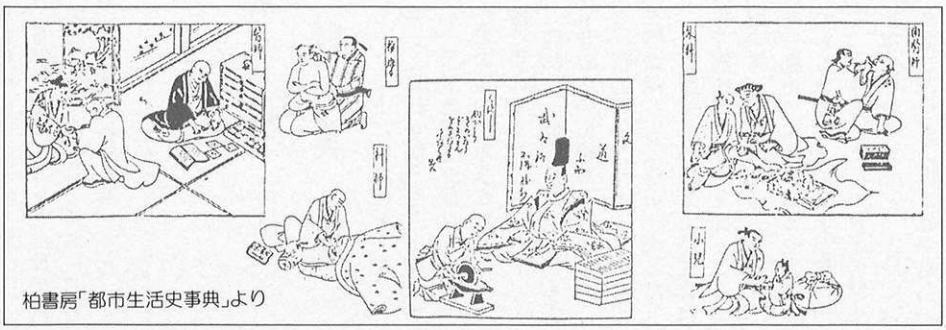
しかし、現代人には想像もつかない、遠い所まで出掛けていることには驚かされる。地図の上に印を付けてみると、熊谷新宿があり、竹沢靱負村（現小川町靱負）、古寺（小川町）、奥畑・大附（都幾川村）、麦原・古池（越生町）、成木（青梅市）等が見出される。隣の部落へ行くにも峠越えが普通だった時代に、どんな経路をたどったのか、今となっては謎解きに等しいことである。しかし、この覚書を残した将監という漢方医のたどった道を探ぐることによって、忘れ去られていた峠がよみがえって来るように思われてならない。

この医師の在所大蔵山は、三方山に囲まれた文字通りの山村である。谷川沿いの道は開かれた唯一つの出口であるが、峠や尾根道の方がより多く使われたことは、縁戚関係などをたどってみてうなずける。昭和初年までは、総出で六つの峠の草刈りが行なわれていた記憶もあり、今まではハイキングコースになっている道も、かっては村人達の重要な生活道路であたはずである。

覚書にある小川町方面への道筋を考えてみると、大蔵山の自宅を出発して大蔵平にで、そこから正丸（坂元）の谷をさかのぼり、子神戸からみたじりを越え北川岩井沢に降りる。ここは最近まで使われていたという。九十九折を登りつめると櫟峠。古い道標が残っている。正面に「ねのごんげん」、「右ふどうみち」、「左いちばん」、裏に「じこうじみち」と刻まれている。都幾川村椚平を経て、西平・慈光寺。さらに一尾根越して古寺、腰越、竹沢と進んで行ったと思われる。一体何時間位かかったのであろうか。早朝出立しても日一杯という所かも知れない。竹沢靱負村金次郎という名が五回も記録されているところを見ると、よほど親しい間柄だったと思われるが、現当主に聞いてみてもその関係はわからなかった。将監は金次郎宅に逗留して、小川町や都幾川を回診して歩いたことも想像できる。また、大野という地名も見えるから、刈場坂峠の道をとったこともあったであろう。

越生方面へは高山から、傘杉峠か飯盛峠越えであったと思われる。高山常楽院・池端坊太仲・右京の名が、散見されるだけでなく、米の道でもあったと聞いているからである。水田の全く無い山村では、越生地区に小作田を持っていて、これらの峠を登りつめた尾根道を高畑まで、馬で送りつけて来る。そこから先は受主が牛の背に積み替えて、北川の間野へ降り、やなぜを越えて大蔵平と運ばれたと聞いたことがある。したがってこの道は、人の往来も多かったし、茶店等もあったと思われる。薬箱を担いだ供を随えて、馬の背に揺られて行く総髪の姿が、目に浮かぶような気がしてならない。

名栗地区では、八ヶ原才次郎・八百吉・湯の沢壱五郎の名があるが、ここは名栗谷の最奥地、大蔵山とは伊豆ヶ岳を隔てた背中合わせの地区である。一山向うの名栗へは峠道、尾根道と幾筋かあったが、伊豆ヶ岳の登山道になっている現在のハイキングコースは、急坂が多く危険な沢道もあるので、おそらく、たとえ近道であっても避けたにちがいない。現在、名栗少年自然の家が利用している道は、炭焼きの人が通ったり、縁家への往き来にも使われたというから、正丸峠と伊豆ヶ岳の中間点の鞍部を越えて、山伏峠へ出る。ここからは、八ヶ原までは目と鼻の距離である。湯の沢まで足を伸ばしても、ゆう〳〵と日帰りが出来たであろう。地元の人達だけが通る杣道だから、十キロ位の道のりでも、難渋なことであったと思う。草鞋掛け、尻端りで、蜂や蛇に怯えながらの道行きではなかったろうか。またこの尾根筋は雷が多い所で、生命からがら逃げ帰ったという古老の話も伝わっているので、気をゆるめることの出来ない峠道の一つだったと思われる。



柏書房「都市生活史事典」より

シリーズ・地場産業めぐりⅣ

お茶とアメリカの独立戦争

内野博司

新茶の季節となり、飯能地方でも、あちこちで茶摘み風景が見られる。日常なにげなく飲んでいるお茶ではあるが、日本、そして世界の歴史に大きくかかわっている作物は珍らしい。

私たちの郷土である入間地方からも、明治の頃は、お茶が輸出され、当時の日本の経済に生糸とともに大いに貢献した。当時の包装箱は、入間市の茶業試験場に展示され、その様子がしのばれる。

世界に目を向けると、お茶は、多くの面で世界の歴史の原点となった。

ヨーロッパにお茶がもたらされたのは、比較的新しく、十六世紀と言われている。当時、東アジアは、ヨーロッパより多くの面で豊かで、お茶は、その文化的な象徴であり、ヨーロッパの強国であるイギリスに確実に定着していった。なお初期のイギリスのお茶は、緑茶が中心であったらしい。

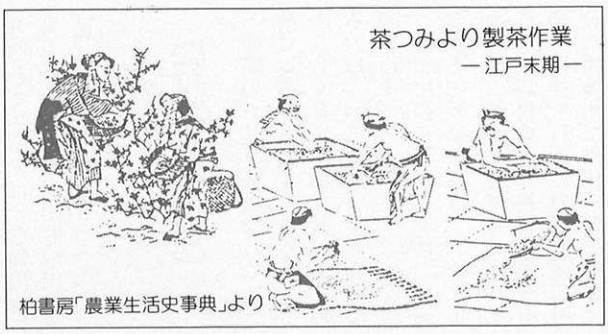
イギリスの植民地であったアメリカでも、お茶は消費されていた。本国イギリスは、植民地アメリカに対して、ガラス・紙・塗料・茶などに税金を課した。それらは、序々に廃止されたが最後に残ったのは、茶であった。税率はわずかなものであったが、アメリカでは、政治上の代表権もないのに課税されることに大いに不満であった。

1774年に描かれた風刺画
イギリス人徴税官吏にボストン市民が無理に茶を飲ませているところ
＊図説「世界の歴史」学習研究社・刊より

一七七三年、ボストン港に停泊していたイギリス・東インド会社のダートマス号など三隻の船には、茶が積まれていたが、納税を拒否され、下ろすことはできなかった。

十二月十六日、ボストンの大集会をきっかけに、インディアンに仮装した住民が、船にしのび込み、積み荷の茶を、ボストン港にほおり投げた。これが、アメリカ独立戦争の発端となったボストンティーパーティーである。一般にはボストン茶会事件と訳されているが、ボストン茶紛争という解釈もある。これを契機にやがて独立戦争に発展し、三年後の一七七六年に独立宣言が採択された。

当時、アメリカでは、茶が多く飲まれていたが、今日イギリス人が世界最大の消費をするのに対し、アメリカ人の消費は少なく、コーヒーが中心である。これも独立当時の影響であろう。

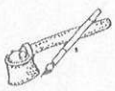


茶つみより製茶作業
―江戸末期―
柏書房「農業生活史事典」より

✓この覚書には、日付が殆ど書かれていないが、一綴目の裏に三月二十四日成木大くらの勇八というのがある。木ちん外同人と読める書き込みが並んでいるから、泊まりがけで往診したのである。成木大くらが、どの辺りであるか地図で当たってみたが、見つけることが出来なかった。薬礼六百文、木ちん代二百文とあり、他のものに比べて安い部類に属する。どんな縁故があって往診に応じたか疑問が残るが、解き明すことはできない。ただ一つ思いつくとすれば、高水山の講と何らかのかかわりがあるのではないかということである。高水山の講は戦前まで続いていて、毎年代参の人がお参りした。さの折、地元成木の人々と交流があったとしても不思議でない。

成木までどのような道筋をたどったか、今となっては皆目見当がつかない。高水山へは子の山から中沢谷津、仁田山峠、小沢峠を経て登ったというが、将監のたどった道も大よそ、その辺りではなかったろうか。中沢までは同じ上我野郷で、何度も診療に出かけているし、子の山詣の表街道でもあるから、春の日差しを一ぱいに浴びて、新緑を賞でながら歩いたと思うが、その先はどうだったのか。異郷を踏む思いで、迎えの人について黙々と歩く姿が浮かんで来るような気がしてならない。

最後に、峠越えして診療したと思える地名を拾ってみたい。穴切（現花桐）・薪木（久通）・北川間野・岩井沢・飛村・高畑・風影・仁田山等である。回診する方も大変だったろうが、病人をかかえた家族や隣人の労苦は、それに倍するものがあったと思われる。



比企地方の民俗

仲島公夫

（萩日吉神社大杉）

九月の例会に比企の歴史散歩を実施した。私は日程の都合上参加できなかったが、参加した会員の方がたは、比企の風土にふれ、遺された文化財を目のあたりにすることによって、歴史の深さを体験されたことと思う。

後日、井上会長より事後学習会を行なうので、何か話をするようにとの依頼があった。歴史散歩に参加していなかったため、何を話したらよいか大変迷いもあったが、いくつかの資料を散見する中で、一つの特徴的なことがわかってきた。それはこの地方に流鏑馬の伝承地が多いということであった。

事後学習会では、この流鏑馬について話をさせていただいた。今回のその時の要旨をまとめてみた。

〔比企の概要〕

比企地方は埼玉県の中央部にあり、県を一まわり小さくしたような形をしている。地形的には西から東へ山地、丘陵、台地、低地へと続き、県の地形とよく似ている。比企丘陵はこの地方の中央部を南北に走っている。

この地域は歴史的にも早く拓けたところで、旧石器時代の遺跡も確認されている。古墳時代になると野本将軍塚古墳（県指定史跡）や吉見百穴群（国指定史跡）が築造され、奈良時代になると、鳩山町を中心とした南比企窯跡群において、窯業生産が盛んに行なわれ、武蔵国分寺にも瓦が献納されている。

中世になるとこの地は、武蔵武士が抬頭をはじめ、鎌倉幕府の成立に係る武人も輩出してくる。これら武人の中では畠山氏や比企氏が、この地方に勢力をもつようになった。菅谷館跡（国指定史跡）は畠山重忠の館跡といわれている。中世も末になると松山城をめぐる攻防なども行なわれた。

〔流鏑馬の分布〕

流鏑馬は走る馬上から弓で的を射るもので、もとはうまゆみといい、のちに矢馳馬（やぶさめ）、これが転化してやぶさめとなった。鏑矢を使うところから流鏑馬と記すようになったといわれている。

県内の流鏑馬伝承地は九ヵ所あり、そのうちの六ヵ所は比企地方に集中している。残る三ヵ所も越生町・毛呂山町・児玉町とこの地方に近接している。しかし、これらの中で今日まで伝承されているのは、都幾川村の萩日吉神社と毛呂山町の出雲伊波比神社のみである。

流鏑馬の伝承地一覧

伝承地		備考
鳩山町大豆戸	三島神社	中止
玉川村五明	春日神社	〃
児玉町児玉	八幡神社	〃
嵐山町鎌倉	八幡神社	〃
小川町大塚	八幡神社	〃
小川町角山	八幡神社	〃
越生町西和田	春日神社	〃
都幾川村西平	萩日吉神社	継続
毛呂山町岩井	出雲伊波比神社	〃

〔行事の内容〕

流鏑馬の伝承地については、前に述べたとおりであるが、このうち今日まで引き継がれているのは、わずか二ヵ所のみとなっている。

鳩山町の三島神社では、地元に残る記録によれば、文政九年（一八二六）に中止になっている。玉川村の春日神社、児玉町の八幡神社は明治時代、嵐山町の八幡神社は大正末期に中止になっている。小川町の八幡神社二社と越生町の春日神社は、昭和四十年代まで伝承されていた。ここでは現在も行なわれている都幾川村萩日吉神社の流鏑馬についてふれてみる。

萩日吉神社は通称平の山王様といわれ、欽明天皇六年創建と伝えられる古社である。流鏑馬は一月十五日に行なわれるが、かつては霜月二十六日に行なわれていた。明治十九年にこの行事を復活する時に、一月十五日に改めたといわれる。現在この行事は、三年に一度行なわれている。

次に流鏑馬の内容であるが、旧明覚郷（都幾川村）、旧大河郷（小川町）、旧平郷（都幾川村）の三つの郷で運営されてきている。明覚郷では、荻窪氏・市川氏・馬場氏が馬を出し、大河郷では横川氏・小林氏・加藤氏・伊藤氏が馬を出している。流鏑馬はこの七氏で運営され、乗り子も成人した七氏の長男という規制がある。

一方、馬場をつくるのは、平郷の坂本家と宿組の人々が受け持っている。七氏はいずれも先祖が木曽義仲の家臣であったという伝承をもち、馬場づくりを担当する坂本家は、かって落ちのびてきた七氏を助けた家として位置づけられている。

行事の準備は一月二日から始まり、本番の十五日はそれぞれの郷から、馬、乗り子、矢取り、口持ちらの行列が当番の家から出発し、神社へ向う。神社前につくられた馬場では、朝的（マトウ）と呼ばれる馬見せ行事や、駆ける馬上から乗り子が的に向かって、矢を射る夕的などの行事が披露される。

萩日吉神社　神殿にて

歴史史料館にて

〔比企めぐり〕

〔おわりに〕

比企地方の流鏑馬について、県内の状況を見ながら、概略述べてきたが、伝承地が鎌倉街道に沿った地点にあること、多くが八幡神仰に関わることなどがわかってきた。このことについてはさらに調査を重ね、また機会があれば報告したいと考えている。

平成2年度の活動

精明歴史散歩

平成二年度は、記念すべき年でした。それは郷土館がオープンしたからです。郷土史研究会の弟分、郷土館友の会もスタートし、合同の勉強会も行なわれました。心の触れ合いは、新しい息吹きとなって、根っ子が大きく広がっていったような気がいたします。参加できなかった方々に、いろ〳〵なできごとを報告いたします。

◎四月例会（4/21）

◆郷土の重文

講師　井上峰次　氏

開館記念特別展に合わせて、「郷土の重文」軍荼利明王立像、雲版、福徳寺阿弥陀堂を丁寧に解説。普段拝観できない国指定の重要文化財に接し、郷土館友の会との共催事業は、開館記念にふさわしいものであった。

◎六月例会（6/10）

◆記念講演、スライドとお話「さきたまの中世」

講師　有元修一氏（県文化財保護課係長）

小山市長、森文化協会会長を迎えて、今年度事業計画、予算などが承認された。なお、事務局が郷土館内となる。

◆「郷土はんのう」第十号発行

◎九月例会（9/8）

◆比企地方めぐり

講師　岡野達雄　氏

〝川越〟に次いで、二度目の市外バスツアー。慈光寺・嵐山歴史資料館など見学。四十五名の参加者が、比企地方の歴史の跡をたどった。

◎十月例会（10/14）

◆第六回　郷土歴史散歩

――精明地区めぐり――

郷土歴史散歩も、両吾野から始まり、二区・加治・南高麗・旧飯能・精明へと、ついに六年の歳月をかけて終わりとなる。

この企画は郷土を知るきっかけとなり、また、各地区の理事さんの協力で成果の大きい事業であった。

◎十二月例会（12/1）

◆精明地区裏ばなし

講師　島田欽一　氏

◆比企地方の流鏑馬

講師　仲島公夫　氏

九月・十月例会の事後学習会。島田氏の次郎長親分の話、仲島氏の流鏑馬共、興味深く郷土史研らしい勉強会であった。事後学習会は見学会と違った角度でその地域を見直すことができ、歴史散歩に参加しなくても有意義な会である。

◎二月例会（2/16）

◆地場産業めぐり　〝お茶〟

世界のお茶試飲会

講師　内野博司　氏

例年ならば産地見学会をするのだが、冬の季節にお茶……そこで趣向を変えて、お茶の歴史を勉強しながら、いろいろな種類のお茶を味わってみた。水は正丸峠の源流の天然水。こういったこだわりが、郷土史研の層の厚さである。

今年もいい年であった。何よりも親睦が図られ、協力し助け合っていく精神が生まれてきた。お茶の学習会に、古文書を持って来て下さった島崎さん。若さを誇る双木さん。豊島区から参加の滝沢さん。水野・浅見・山川さんの原市場組。インテリの木村さん。それにお茶の接待、受け付けなど、いつもお世話になる女性陣。よくここまで育ってきたなあ……つくづくと思う。

平成三年度 行事予定

●四月例会
飯能のお殿様、黒田氏を語る
●六月　総会並びに記念講演会
講師　庄田元男　氏
「アーネストサトウと飯能」
◇郷土はんのう　十一号発行
●九月例会
新企画〝青梅地方めぐり〟
●十二月例会
こんにゃくの作り方
●二月例会　刀のはなし
郷土歴史散歩に代わって、近隣を訪ねる会が発足。今年は青梅地方を予定している。
また、地場産業は季節に合わないものは、二月にこだわらないで、考えていきたい。新企画を募集しています。

◎新入会員

藤沼由貴子（目高町武蔵台六―一四―六）
中野　享（小岩井七〇八）
山根叔子（笠縫一二二―五）
常田礼子（青木一六―二）
江間孝治（文京区大塚五―十五―十一）
梅原安子（上赤工八―一一二）

会員トピックス

◆副会長坂口さん、日本石仏協会々長に就任。おめでとう。
◆島田欽一さん、歌集「逃水」、浅見館長、「埼玉ふるさと散歩」、小川翠石さん、句集「梅日和」を出版。小谷野寛一さん、「山岡鉄舟」をまとめる。杉山えいさん、文化俳壇で活躍。
◆赤田健一さん、市役所を定年、第二の人生に期待！
◆加治郷土史研、がんせいくずを文化祭に展示。よかったよ。
◆十二月例会後の忘年会。肩を寄せ合って合唱。会長の飯能小唄がピカイチ……？
◆郷土館友の会、若いパワーでただ今、会員四八〇名。すごい力。
◆その友の会、郷土館ギャラリーをオープン。展示室が空いている7/2～8/31まで。
◆その友の会、郷土館ギャラリーをオープン。展示室が空いている7/2～8/31まで。

新会員募集

会費納入、入会の手続きは
郷・土・館・で
◉事務局　〒357
飯能市飯能二五八―一
飯能市郷土館内（柳戸）
電話〇四二九―七二―一四一四

訃報

会員の小槻正信さん・一川正久さんご逝去。心よりご冥福をお祈りいたします。
小槻正信さんは、絵馬師であられ、その素朴な技の素晴らしさは、各地に残されておりますが、その一部をここに掲載させていただきます。

「飯能の灯籠絵」より

だるま大酒（だるま大師）

恵びす大根食う（恵比寿大黒）

煮たものふうふう（似た者夫婦）

郷土館スタッフをご紹介します

館　長　浅見徳男（真面目な研究者）
学芸員　柳戸信吾（特展のポスター作成は彼です）
〃　尾崎泰弘
今年より二十五才の若者、尾崎さんが、郷土館にやって来ました。「郷土館は大工仕事もするんだね」（着任早々の弁）
アイドル滝田さんは、加治保育所の先生です。柳戸さんには事務局をお願いしていますが、展示されるまでには目に見えない苦労があるようです。若い力に期待しましょう。

これからのもよおしもの

仮称**飯能の織物**
十月中旬～十二月中旬

◎**郷土館ギャラリー**が
オープンします。
詳しくは、郷土館友の会まで。

編集後記

皆さんの手許に〝お便り〟が届くまでには、何度か事務局会議を開いて案を練ります。夜六時半から郷土館で行ないますが、その度に郷土館が出来てよかったなあ、と思います。歴史の殿堂…？　研修の場として、新しいサロン文化が生まれていくといいですね。
みずみずしい五月の日曜日、表紙撮影のため、会長のアシスタントを務めました。宝蔵寺の周りには、昔日を偲ぶ空間がありました。精明散歩でも行きましたが、何かを考えたくなった時、思い出して訪ねてみて下さい。きっと、いいことがありますよ。
（桑山）

題　字　小谷野寛一
表紙写真　井上峰次
写真説明　坂口和子

郷土はんのう　第十一号
発行日　平成三年六月八日
発行所　飯能郷土史研究会
飯能市飯能二五八―一
飯能市郷土館内
☎〇四二九―七二―一四一四
印刷所　コバヤシ印刷